東南アジアの船旅(2)

大阪大学経済学部　長浜穆良

マニラでの家庭訪問

（2月13日）

最終日は全員3百数十名が3・4名ずつに別れ，あらかじめ指示された家庭を訪問した．家庭ごとに番号がつけられ，埠頭にクルマで迎えにきた受入家庭がその番号を大書した紙を差し上げ，団員がこれをみて訪問家庭を探す仕組で，何か里親に引取られてでもいくようなようすである．

受入家庭は国会議員，大地主，実業家などいわば上流階級が多く，わたくしの訪問したマルチーネ氏も仲々立派な邸宅を構えていた．

早朝より氏みずからクルマで迎えにみえ，「ワイフは目下料理の準備中なので，それまで2・3時間市内を案内しよう．」と，すでに見物した所をたしかめたうえで，メモリアル・パークへ行こうということになった．メモリアル・パークは非常に立派な公園であるが，何となく心の沈むような静かな雰囲気で，人影も少ない．入口でクルマを止め，徒歩で数百メートル進んだとき，感の鈍いわたくしにも，そこが何であるかが，ただちに解った．第2次大戦の戦死者が眠る墓地公園である．直径50メートルはあろうか，円周状の大理石の大回廊には全戦死者の名前が壁面に彫り込まれている．

マルチーネ氏はどういう気持でわれわれ日本人をここに案内されたか，非常に好意に溢れた人であったから，特別の意図はなかったとは思うが．

このような戦争の傷跡は東南アジアの到るところにある．話はとぶが，船の警備にきた若いガードマンにたばこを差し出したとき，彼は記念にといって100ペソ札をくれた．100ペソといえば6千円である．そんな大金をもらう理由がないと断わると，「よくみてください．それは使えないんです．」という．なるほどその紙幣には漢字で大日本帝国政府と印刷してある．

さて，簡単な買物に時をすごすうちにようやく昼前になり，頃はよしと当家を訪問した．金持ちの多いマカティ地区のモダンな邸宅，玄関を入ると大広間で，すでに食事の用意もととのい，話相手として7組の知人夫婦も呼ばれていて，大歓迎ということになった．いずれも壮年実業家といったタイプで，同席の半数は万国博で日本にいったというし，中には毎月日本にいくという人などもいる．

マルチーネ氏はスペイン系で，父はセブ島に生まれてキャプテンであったとのこと，夫人も仲々の美人で長身に赤いパンタロンがよく似合う．娘さんはアメリカ人と結婚してサンフラン

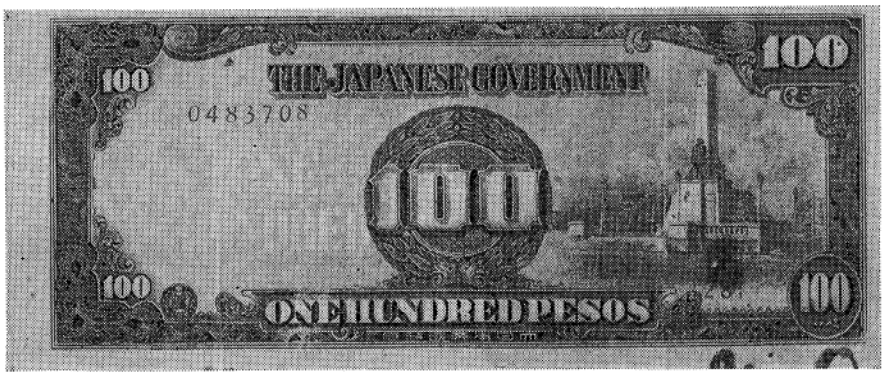


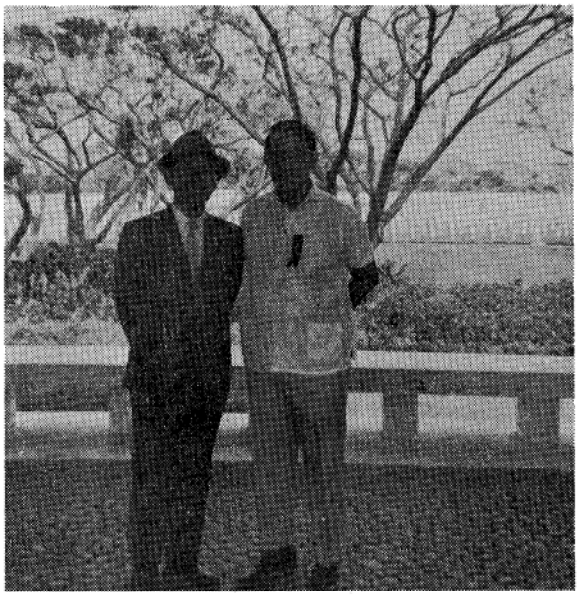
写真1.　軍票，下部に大日本帝国政府とある

シスコにおり，息子さんは20才の大学生である．遠慮して料理をとりかねていると，夫人みずから細やかな心づかいでサービスされ，スペイン風の山海の珍味に舌鼓をうった．何しろ向こうは10数名，こちらは3名，その上あやしげな英語であるから1時間もすると言語障害を起こしそうになってきた．そこで，3時には帰船ということになってもいたし，買物もあるなどと口実をもうけて1時半には失礼することにした．別れの挨拶とともに葉巻1箱50本入りをみやげにいただいたが，「ユーはタバコを吸うか．そうか，それはよかった．これは非常に高価なものであるぞよ．」などというところが日本のしきたりとは非常にちがっている．われわれも数少ない手持ちの単語の1つ「サンキュー」を連発して辞去した．

船はベトナム沖へ

（2月13日夕刻～2月17日）

マニラ湾は西にむかって開いていて，湾口なかば，はるか彼方に右方より突き出ているのがバターン半島である．乾季には遠くの西の空が晴れ，近い空に薄雲の張ることが多く，このため燃えるような夕焼けが海に映える．椰子の葉影を前景とするマニラ湾の夕焼は世界的に有名だそうである．われわれはこの夕焼に吸い込まれるように，思い出多いフィリピンをあとに，



真写2. マルティーネ氏と，戦没者墓地公園にて

一路舳先を西に向けて出帆した．

われわれの船は給油・給水のためにシンガポールに立寄り，次の訪問国インドネシアのジャカルタに向かうことになっている．シンガポールはマニラから南西2,500キロの位置にあるが，船は暗礁を避けるためにまる一昼夜真西に進み，ベトナム沖に出る．

翌14日は聖バレンタインデーとかで何人かの教官に女子団員からプレゼントがきたというニュースが話題になる．部屋に居てノックがあるたびに「きたかな」と年もわきまえず，さもしい根性を起こして，かすかに期待して待つこと久し，夕食後になってやっと可愛らしい2人の女子団員からプレゼントがあった．閉された社会でひがみっぽくなっていたわたくしも，これで世をはかなんで入水自殺するにも及ばなくなったわけだ．めでたし，めでたし．

15日の朝6時には，船はベトナム沿岸を南下しており，サイゴン沖250マイルとのこと．この付近では，ときおり往きかう船はみな国旗を掲げて国籍を明示している．アメリカの哨戒機が飛んでいる．ソ連船も北上するのである．ソ連船は中国との関係がわるく，スエズ運河も閉鎖されているために，北ベトナム援助物資を，じつにアフリカ南端回りで，かのバルチック艦隊と同じ航路で運ばなければならない．また，この海域は第2次大戦中，多数の尊い人命をのんだところでもある．緒戦においてイギリスの極東艦隊は主力戦艦のプリンス・オブ・ウェールズ，レパルスを失なっている．日本の軍人・民間人も「みずく屍」となった．われわれ団員の中にも肉親をここに失なった者が43名もいる．われわれは千羽鶴を折り，紙の花を作って海に捧げた．夕刻5時15分から全員，後部甲板に集まっておごそかに慰霊祭が行なわれた．団員の中には僧呂もいて，僧衣をまとい読経も行なわれた．この慰霊祭は全団員の全く自然の感情のおもむくところで，想像をこえる多数のみたま，百万のいまはなき同胞の冥福を祈った次第である．

地図でみるとマニラ・シンガポール間は目と鼻の距離にあり，飛行機ならひと飛びであろう

が，そこが船のよいところで，マニラをでて4日目の16日もまだ海また海である．16日の早朝5時には，南の空に，やや右に傾いたサザンクロス，すなわち南十字星がみえた．

南十字星の大きさは，視覚としては，ロザリオ（カトリック信者のもっている，じゅずのようなもの）についている十字架ぐらいで，ちょうどその先端に当たる部分に4つの星がある．上下と左のが1等星で右が2等星，たての星の線の延長線と水平線の交わるところがだいたい南になるので，北極星とともに海上で方角の見当をつけるのに役立つ．この星は真南よりはやや東寄りの水平線から起きあがって，真南で直立し，時間がたつとともに右に傾いていく．ちょうど2月の中旬では右に20度位傾いた頃に夜明けとなって消えていくのである．われわれに北極星がなじみのように，南方の人や，船員にはよく知られていて，この名をつけた客船がイギリスにある．

さて，夕刻にはマレー半島がみえ出し，船の往来がはげしくなってくる．シンガポールに近づくにつれてますます船はふえ，1万トンをこえる外航船が何10隻となくたむろしている．さすが世界第3の貿易港だけはある．

船はここでひと晩ゆっくり休み，翌17日は給油・給水，本船は神戸の水と油を満タンにしてきたが，いまやそれもからっぽである．わたくしは，「これからは洗面所の水を飲むな，備えつけの蒸溜水を飲むように」とのアナウンスをききもらして，ガブガブやっていたために，この2・3日あとから何となく下痢がつづき，教えられて止めるとすぐにとまったのは，どうもシンガポールの水があたったらしい．もっとも，シンガポールは生活水準の高い衛生的な街なのだが．

この17日は故国出航以来はじめて，雨が降った．団員の1人，石川県の江端君は腎臓炎のために下船し，シンガポールから空路帰国することになった．雨にけむる中をランチにのって本船を離れていった彼の心中は察するにあまりある．しかし，後日，療養の甲斐あって，われわれが神戸に帰国したときは元気に出迎えにみえ，目的を達したものとして解団式にも一緒に参加することができた．本当によかったと思う．ジャカルタやマドラスの強行スケジュールは健康な者にもこたえたのだから管理官の判断は正しかったわけである．

夕刻6時には給油・給水も終え，船の重心は下がり，したがって復元力も高まり，船はふたたび元気をとり戻して，一路ジャカルタめざして出発した．

赤　道　祭（2月18日）

午前4時20分に赤道を通過したこと，それは東経106度1分においてであったこと，それらのニュースが朝のつどいで知らされた．今日は赤道祭の日である．紺碧の海，緑の島々，灼熱の太陽の中を船は微動もせずに滑っていく．突然，誰かが「赤道がみえるぞー．」と叫んだ．あわて者がいて何人かがデッキにとび出す．もっと念のいった暇人がいて，本当にみえる，嘘だと思うならみてみろと双眼鏡を手渡すので，覗いてみると本当に赤い線がみえるではないか．もちろん，これは手のこんだ作品でレンズの前に赤い糸を糊で張ってあるのである．

赤道祭は予定の行事なので，衣裳も本格的なものが用意されていて，いろいろのグループごとに日本各地の民謡，踊り，船内クラブ活動の成果であるコーラス，器楽演奏など，朝の9時

写真3， 赤道祭

から夜の9時まで12時間，バンケット・ホール，スポーツ・デッキ，食堂などの会場において華やかに行なわれた．

満天の星空のもとで演じられた楽団「南十字星」の「星空のトランペット」，大阪府警の婦人警官，後藤敦子さんの唄う「女の意地」など仲々よかった．帰国後，このおまわりさんに声も唄いっぷりも全くよく似た人をテレビでみたが，西田なんとかいう人だった．

教官団の出しものとしては星村平和（現文部省教科調査官），折笠常弘（福島県社会教育主事）両教官原作，「南洋版，金色夜叉」を一部，筆者が大阪弁に脚色し，七五調のナレーションも作り，前日は役者である林部一二団長（国立社会教育研修所長）演ずるミスター・センターボ，じつは貫一，藤田富雄教務主任（立教大学名著「宗教哲学」あり，目下渡独研究中）演ずるお宮，いやミス・キラキーラ，海田能宏教官（前にも紹介したが，水のシステムを研究のため目下渡米研究中，京都大学）演ずるトミヤマならぬミスター・ルピアの3人を相手に，猛烈な大阪弁の特訓を行ない，背景，舞台装置も制作して，万全の態勢を備えて望んだにもかかわらず，結果は惨憺たるもので，ナレーター兼プロンプターの筆者が舞台を右往左往して，セリフを叫んだり，マイクに戻ったり，しかし，それでもやんやの喝采のうちになんとか終演まで持ち込んだ．演目コンクールの順位は，意外や意外，いや予想どおりというべきか，最下位をちょうだいしたものである．

船は文字通りの閉鎖社会であるから，お互いに欠陥のある人間が，自己の欲求を充足しながら，青年の船としての目標を実現していくためには，円滑な人間関係を最も必要とする．われわれの，この航海は，社会学的にも心理学的にも格好の材料で，心理的葛藤，動機づけ，欲求，リーダー・シップなどの行動科学の基本概念の典型をみるような気がする．ともかく，そろそろ，蹄病，うつ病的傾向を示してきたメンバーにもきょうの赤道祭はうってつけの対症療法であった．

当今，海外旅行は話題にもならなくなってきたが，客船で赤道をこえる幸運に恵まれた人はまだ少ないであろう．われわれ全員は和英両文で書かれた唐草模様の立派な赤道通過証明書を鈴木捷船長より，うやうやしく拝領し，そして，甲板での夕食，盆踊りなどを楽しみながら思い出多い赤道祭の一日をおえたわけである．

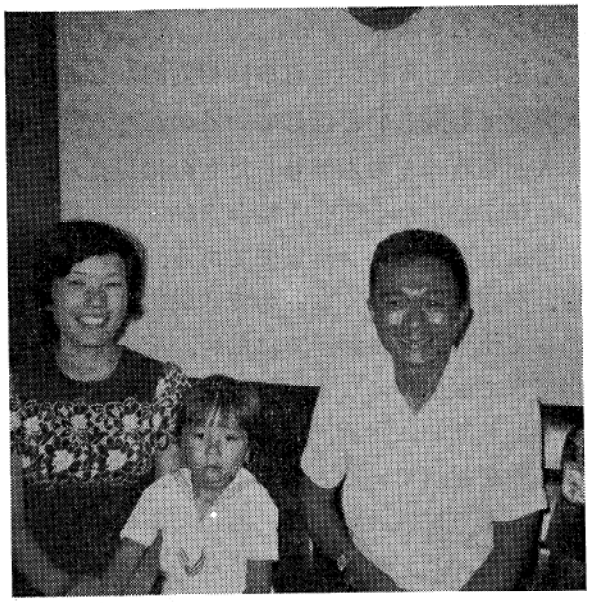
ジャカルタ第1日（2月19日）

早朝，ジャカルタ郊外のタンジョンプリオーク港着，入国手続きをおえて，正午まえに下船，サムドラプーラ埠頭にある建物の2階大ホールで歓迎式が行なわれた．場内は人の熱気で蒸し暑く，臨席の政府代表，団員いずれも背広にネクタイ，天井にはもう日本ではみられなくなった3枚羽根の扇風機がまわるだけで全員汗びっしょり，港もさびれた感じで，シンガポールとは船で1日半の距離にありながら，双方の経済力の相違を如実に反映している．

この歓迎式場へ向かうわずかの時間に，わたくしはじつは懐しい教え子，パチロイ君に5年ぶりに逢って立ち話をした．彼は大阪大学経済学部卒業のインドネシア人で国費賠償留学生として来日，わたくしのゼミナールの出身である．当時この制度による指導教官を担当した関係で，他にスディアルタ君(現在，天理大講師)，ユスプ君（現在インドネシア銀行勤務）もあい前後してわたくしのゼミを出ている．パチロイ君は美人の日本娘を奥さんにして帰国し，政府の航空部門に勤務，オランダのハーグで1年間研修後，現在産業省の官吏である．

行列からはずれての立ち話なので，改めてゆっくり逢いたい，家内もぜひお逢いしたいといっている，日程はどうなっているかなど，とり急ぎ打ち合わせて別れた．当方の日程はしばしば変更されがちで，その上，自由時間もほとんどないので，きまり次第奥さんに電話することにした．役所は2時までだが，奥さんの勤め先であるイトチュー・ジャカルタ支店は4時までなので電話は通じる筈であった．

ところが，午後船内で行なわれた交歓会は現地側の希望により，海上を3時間ばかり遊覧航行ということになってしまった．そうなると，



真写4. 船を訪ねてきたパチロイ君夫妻と坊や

もちろん電話は通じない．結局，連絡不能に終ってしまったが，ずっと電話を待たせたということは，翌日，今度は夫妻と坊やが来船されて知った次第である．奥さんは5年前，神戸，中山手の回教寺院で行なわれた結婚式のときと少しも変わっていなかった．彼のハーグ滞在中は，新婚早々で，しかも馴れぬ異国の，主人の実家（マカッサル）にとり残され，その後も生活は楽ではなかったと思う．彼ほどの経歴の持主でも月給は現在なお1万円そこそこである．夫人は日本への里帰り費用捻出のためもあって仕事に出ているが，給料は主人より良くて3万円だそうだ．

インドネシアはひどいインフレを経験しており，1954年から1965年までの間に，消費者物価は600倍以上に上っている．これが1965年9月30日の「9・30」事件（革命失敗）およびスカルノ体制崩壊の一因でもあった．

話は前後するが，船上交歓会には現地青年，とくに大学の日本語科の学生，日本文化女子短期大学の女子学生が多数出席し，習いたての日本語で話す現地青年もいて，日本語勉強会のようななごやかなムードが漂った．わたくしに日本のことを熱心に尋ねたエッピ・ヘルリナ嬢は，前記女子大の学生で，もともとはスペイン系のカトリック教徒，エッピという名前もエフェリンに由来するとのことであった．日本に行ってドレスメーキングの勉強をすることが念願だそうである．

夜は最近竣工したばかりというカルティカ・チャンドラ劇場で民族舞踊と民族音楽の夕べが催された．劇場の規模も演目の内容もともにインドネシアとしては第一級のもので，全国の代表的な舞踊が2時間以上にわたって行なわれた．バリ，北スマトラ，中部ジャワ，セレベスなど各地の代表的な舞踊で，源流の1つはインドのラーマーヤナ物語，他の1つは土着の舞踊にスペイン風の舞踊が混合したものである．

北スマトラの扇のダンスは，マニラでみたものと同系で，黒い扇やコスチュームもスペイン風，ややゆるやかなコンチネンタル・タンゴのリズムにのって演じられる．インドに源流を発するものはバリ島に残るヒンズー系で，物語りの内容は基本的にはインドのものと変わらないが，舞踊は同系統の両極の一端のように思える．バリの舞踊は，（などといい気になっていうほどの見聞知識もないが）インドのそれの雄渾に対して，繊細といえるのではなかろうか．もちろん，いずれも多年の伝承過程を経て洗練の極致を示してはいるのであるが．

最後に演奏された竹製の民族楽器アンクルは1楽器1音程しか出せないが，見事な合奏音色を出す楽器で，それぞれの音程を受けもった50人ばかりの，民族衣裳で装った若い女性が奏でる「さくらさくら」のメロディーには期せずして場内より拍手のどよめきがわき起こった．このようにして，赤道の南にある熱帯地方の異国にいることも忘れ，ガメラン音楽に陶酔するうちに，夜も更けて閉会となり，われに帰って，深夜の高速道路を東進し，ジャカルタ第1夜の夢を船に結んだわけである．

お上りさんの見物（2月20日）

ジャカルタ第2日目は国会議事堂，国立競技場，みやげ物街（パッサル・バル，主として華僑の経営する立派な商店街でいわばジャカルタの銀座のようなところ），独立広場と独立記念塔，中央博物館などを見学，その後いったん帰船して夕食をとり，ただちに第一装に着替えて

真写5. パッサル・バル街

ユース・センターにおける交歓会にのぞんだ．

この日は，はとバスで東京見物をしているようなものであったが，短時間に有名なところを廻って，それなりにいろいろのものに出くわした．

国会議事堂は，多年，財政困難のために，付帯的な部分は未完成のまま放置されていたのが，最近漸く工事を再開し，目下建設中，ないし増築中で，その仕事ぶりたるや，日本の建設風景に比べればきわめてのんびりしたものである．

議事堂のテラスに出ると向こうの方に競技場がみえる．その間は青々とした草が生えている．畠かも知れないし，草っ原かも知れない．木もたくさん生えている．日本では，木は植えられているという感じだが，インドネシアでは生えているという感じである．人間はたしかに多く，人口の都市集中は大問題になっているのだが，生活ぶりは日本人の目からみればのんびりしたものにうつる．

インドネシアは広大な面積に，カリマンタン（ボルネオ），セレベス，西イリアン（ニューギニア），ジャワ，スマトラなどの主要な島，無数の小島が散在し，人口，資源とも日本にまさる，大国としての潜在力をもつ国である．確かに暑い国だけれども，晴れた日にネクタイ，上衣着用で過したこともある．戸外に出られないような暑さではない．

生活の厳しさというものは相対的なもので，人間誰でも厳しいと感じているのだろうが，日本人からみるとのんびりしたものに見える．学校は朝7時頃から午後1時か2時まで，役所，事業所もだいたい2時までである．それから昼寝，夕方から涼しくなるので活動的になる．といって仕事をするわけではない．ぞろぞろ人が出てきて賑やかになる．年中そうなのである．

港から都心に出る，10キロあまりの道路添いに果物を並べている人が多くいる．台の上に溢れんばかりに盛っている．赤色で栗のようにとげがあり，ピンポン玉のような殻を割ると中から甘酸っぱい白い実が出るランブータンという果物だが，売れているところをみたことがない．というのも，そこいらにいくらでもあって，ちょっと植えておけばすぐ大きくなって実がなるのである．

服地なども厚手ものは不要だから生活費はあまりかからない．こんなところをみて現地滞在の日本人など「だからだめなんだ」といって張り切るそうであるが，このような生活を一概に怠堕であるとか文化水準が低いとかいうことはできない．物質的生活水準も，ある段階までは幸福の必要条件ないし補完手段であろうが，限度を越すと人間性の破壊にもつながりかねないということは，最近の日本人の痛感しているところである．

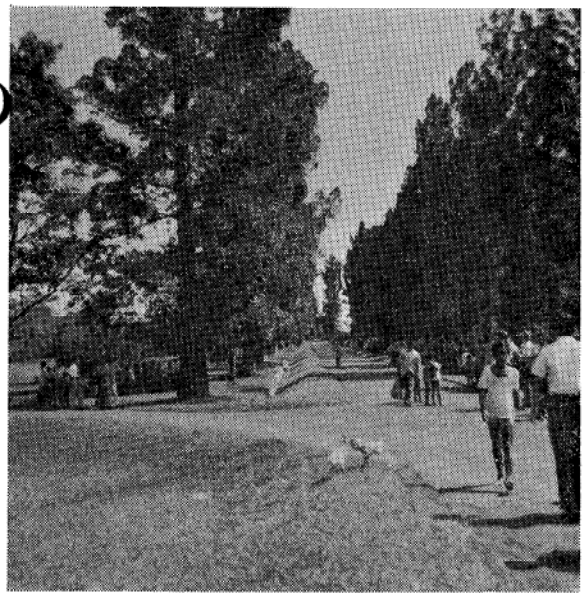
話が本筋からそれてしまったが，お上りさんコースにも得難いものがあり，とくに博物館に収蔵されているヒンズーおよび南方仏教系の美術・彫刻品は，日本の古美術愛好家にも感銘を与えるにちがいない．さて，夜のユース・センターにおける歓迎会では，前日よりはスケールこそ小さいが，観客席と同じフロアーの，咫尺の間において民族舞踊が上演され，また多数の日本青年が，例の竹の楽器アンクルの即席指導を受けて，たちまちにしてインドネシア民謡「サリナンデ」を合奏する．これに対して日本青年の阿波踊りに共感したインドネシア政府高官夫妻がつぎつぎに飛び入りするなど，交歓の目的を十分に達して散会となった．どうもこの

2日間は，物珍しさも手伝って遊びほうけたような感じである．

ボゴール植物園とプンチャック峠
（2月21日）

ボゴール植物園はジャカルタ南方50キロのボゴール市にあり，隅々まで完全に手入れのゆきとどいた約110ヘクタールの世界最大の熱帯植物園である．1745年，ここにオランダ総督の官邸が設けられ，これは今日大統領別邸となっている．植物園は1817年の創設で，インドネシア生物学会の本部もボゴール市におかれ，園内には研究所の他に動物学博物館などもある．植物の種類は5万種，椰子だけでも200種，とこんなデータをいくら並べてみても読者には実感は湧かないと思う．

風景を示す一例をあげてみよう．行手遙かに高さ100メートルあまりの大木が林立していて，そのまわりを何百羽というとんびの群が舞っているようにみえる．ところが近づいてみると，これが幅1メートルもある大こうもりで，霞むような梢の先端にも黒い袋のように鈴なりにぶら下っている．あまりにも広いので，こういう光景も植物園内部の片隅の出来事にしかすぎない．5月，11月が開花期でいまは花が少ないとのことであったが，それでも背丈の2倍もあるカンナが鮮かな原色の花をつけ，また，これも種類の多いハイビスカスのさまざまな花が目を楽しませてくれた．



真写6. ボゴール植物園

この美しい植物園の中に，どういう訳か現地の子供たちがかなり入り込んでいて，われわれが弁当を食べていると寄ってくる．そして目の前で弁当がらやコーラの空缶の奪い合いが始まる．日本の青年の中にはこういう情景に失望する者もいたが，25年前の日本でも米軍（当時は進駐軍といったが）に群がる子供の姿はよく見られたものだ．

ゆっくり見れば2・3日はかかろうという植物園も数時間で素通りし，われわれは「さよならパーティー」の開かれるプンチャック峠へバスを連ねて出発した．ボゴールは海抜250メートル，人口15万の住宅都市，一方，プンチャックはボゴールの東南30キロ，1450メートルの高所にある．ジャカルタの南に，美しい裾野をひく雄大な火山がみえるが，プンチャックはこの山の肩のあたりにあり，さらに80キロゆくとバンドン（1955年アジア・アフリカ会議開催地）に至る．

沿道の農村風景はヴアン・ゴッホの絵にあるようで，赤屋根に白壁のオランダ風の住居は，マニラ郊外の農村よりも美しく裕富にみえる．高地にさしかかるにしたがって肥沃な平野の眺望がよく，右に左に屈折する道路の両側は一面の茶畑である．軽井沢のような平坦な高原ではないが，プンチャックは植民地時代からジャカルタの避暑地であり，ホテル，レストラン，プール，ゴルフ場等が完備している．

われわれはここで，友好を深めた青年たちとお別れパーティを行なった．いよいよ別れを告げるというときには，2・3百人の相手国青年が1列に並んだところを，当方も1列に並んで進み，1人1人がすべての現地青年と握手をかわすというセレモニーがはじまった．とくに，お互いに知り合った相手には銘々プレゼントを用意して交換しあい，中には別れを惜しんで抱き合う者もいる．こんな訳で行列は仲々進まず，このために1時間あまりかかった．エッピ・ヘルリナ嬢はわたしを覚えていて，わたしとわたしの家族を祝福してと，インドネシア風の

彫刻のはいった銀のスプーンを半ダース，プレゼントしてくれた．

帰りは80キロの道を一気にすっとばしたのだが，さて，これで1日が終ったわけではない．風呂にも入らず，ただちに制服（背広にネクタイ）に着替えて，つぎは大使公邸におけるレセプションである．

公館職員や長期滞在日本人家族のサービスによって，公邸中庭で心ゆくまでの歓待をうけた．つまり，スコッチがぽんぽん抜かれ，さまざまの食物がつぎつぎに用意され，食べ盛り飲み盛りの青年たちが，熱帯樹に囲まれた庭園で思う存分雰囲気に浸り，サービスする側の方々，とくに若い御婦人方も故国の人々のニュースに望郷の念をかきたてられたわけである．

わたくしは，自分の責任もわきまえず，いささかきこしめし過ぎ，また日中の疲れもあって，帰りの車中は青年諸君に醜態をさらすまいと必死の努力をした．埠頭で人員点呼を行ない解散を宣して，キャビンに帰るや，ベッドの上にひっくりかえり，気がつけば朝という始末であった．油断は禁物である．

バティック——ジャワ更紗——（2月22日）

ジャカルタ滞在最終日はテーマ別に組編成し，わたくしは経済コース47名を引率し，スリブアナ手工芸品会社，セラヤック・バティック展示場，ジャカルタ手工芸品センターの3か所を見学した．

手工芸品工場は日本でいえば町工場程度の規模で，年間売上げも1億円に満たない，従業員40人ばかりの工場である．しかし，木製民芸品工場としては代表的なもので，木工機械類は経済援助により，アメリカ，オーストラリアのものが多く，技術は日本のものもある．製品を万国博に展示し，石坂泰三氏の署名入り感謝状が飾られていた．

この工場では社長の好意により，野外に設置された能舞台，といっても椰子の葉の屋根，板切れを打ちつけた舞台だが，ここで，いずこから現われたか，民族舞踊の衣裳に身をかため裸足でつつうとやってきた老妓が数名の楽士の奏でるガメラン音楽にあわせて，ひとさし舞ってくれた．いずれは勇壮な物語りかも知れないが，一流の舞手が桧舞台で舞うのとはちがい，えもいわれぬ哀調を帯びたものであった．

もう1つのわれわれへのサービスは，バティック，すなわちジャワ更紗のろう付け作業の披露である．昔の大工さんが持っていた墨縄の5分の1位の小さな壺に熱で溶けたろうを入れ，これを先が管になった小口から小出しにして，小筆で書くように防染する部分を塗っていくのである．ろうけつ染の原理で，防染のためのろう付け，染色（ろうのついていない部分が染まる），煮沸脱ろう，天日による乾燥，この過程を何度もくり返して多色染色するのであるが，大変手のかかる仕事である．

機械でプリントすれば簡単であるが，手がきには独特の持ち味がある．後で訪問したセラヤック・バティック展示場では染色工程も実演してもらったが，2人の作業者の間に染料桶が置かれ，両側で布の端を持って交互に上下して，じゃぶじゃぶ浸して染めるのである．

展示場はバティック輸出組合の店舗でもあり，経営者は見事な大阪弁をしゃべる．商品は豊富で価格・品質共に保証つきである．バティックにもぴんからきりまであって，超高級品は一着分の染色に2年もかかり，ねだんも20万円もするが，3千円から5千円もだせば手がきで優美なものが得られる．

やまとなでしこにも勇敢な子がいて，店員におかまいなしに日本語で値切っている．「キャン・ユー・スピーク・イングリシュ」といわれても，2000ルピア（2000円）のを，きりがいいから5ドルにしろと，断然日本語で頑張る．ついに根負けした店員が経営者を呼んでくると，経営者は「わたしは女性には弱い」とか何とかいって簡単に値引きに応ずる．

ここまでならわたしもたいして驚かないが，今度は，これを仕立ててくれという．結局，すったもんだの末，あっという間に横の部屋で仕立てられて，彼女は5ドルでバティックのオーダー・メイドをせしめたのである．これがわずかの見学ショッピングの間の出来事である．全

真写7. バティックのろう付け作業

く見事という他はない．

バティックの美しさは現地の人が着用して，はじめて生きるものである．カインといって，腰のまわりにスカートのようにまきつけるのである．上衣（バジュ）は短かく，一般にはレースとか化繊が用いられる．晴着としてはスレンダンという肩掛けが用いられるが，これも薄絹かバティックである．

染料は，昔は天然の植物染料であったが，いまはすべて（地方の例外はあるが）西独から輸入した化学染料で，生地は日本からくるものも多い．手がきの高級品は次第にプリントに押され，ちょうど西陣の織物のように大衆の手の届かぬものとなっていく．いいかえると，大衆品は，いずれは工場で大量生産されて，もっと安く庶民の手に入るようになるということで，これはこれで経済的進歩として喜ぶべきことであろう．人手をかけた手がきのものは労働力が一層高く評価され，益々高価になると思われる．

ジャワ更紗はインドから伝わったものであるが，一説によれば，オランダとの交易中，長崎にもたらされ，その染色法も日本に伝わっていたらしい．ジャカルタではありふれたバティックを，時折り夏の日本でみると，耐え難い程懐しく，鮮やかな美しさに目を奪われるのである．

さて，われわれはジャカルタ最後の見学も終えて2時半には港へ帰ることになった．途中，街中を走るベチャ（客を前にのせる輪タクで3万から5万台もいる重要な輸送機関）の群なども珍しく帰路についた．

夕刻，出航時にはどこの港でもそうであったように，多くの相手国青年，とくにこれまで東京以来同行した6人の青年たちの中には手ばなしで泣く者もあり，お互いに見えなくなるまで手を振り旗を振って別れを惜しんだ．夕景の中にタンジョン・プリオク港は遠ざかり，船はふたたび太洋の中へ静かに船出し，一度通った航跡を辿って，次の訪問国マレーシアに向かったのである．　（46年11月6日記）

付記：前回掲載写真「マニラに憩う“さくら丸”」は当時の機関長，伯野洋一氏撮影のものです．